

湛睿の『心要纂積』について

納 富 常 天

澄観撰『心要』の注釈書については、まえに智照の『心要洞玄記』(解題と本文)を紹介した⁽¹⁾。そして『心要』の本格的注釈書として唯一のもので、澄観における禅思想の理解や、禅教一致思想、さらには仏教諸宗における禅受容の側面を解明する重要な資料であった。また撰述の経緯において、智照の師、東大寺凝然が『華嚴法界義鏡』に全文を引用し、学者の精要、行人の秘術として重視したことを述べると同時に、凝然やその高足、久米多寺禅爾に師事した金沢称名寺湛睿が、その著『五教章纂積』中に、わずか一回だけであるが引文していることについても触れた。

その後、東大寺図書館に『心要抄物』(内題は『心要纂積』一二一函二三三号)が所蔵されていることを知ったが、調査の結果、これが湛睿の著作であることが判明した。また『明和本戒壇院凝然所述書目』の「心要義鑑一卷於身州久米郡清水寺製之」⁽²⁾、『三國仏法伝通縁起』の「于時応長元年辛七月五日、於東大寺戒壇

院述之、花嚴宗沙門凝然、春秋七十二、造此三國仏法縁起三卷、奉為叡覽、献上大覚寺法皇御所、于此御所叡感、以此草本最初写之畢、沙門凝然、造此仏法縁起并十重唯識瓊鑑章一卷、心要義鑑一卷、進覽之(以下略)」の刊記から、凝然にも『心要』の注釈書『心要義鑑』一卷(伝存不明)があったことがわかる。これらは智照の『心要洞玄記』以外にも、さかんに『心要』の注釈が行われたことを示す。ここでは智照の『心要洞玄記』を唯一の注釈書とした前説を訂正すると同時に、湛睿の『心要纂積』について、とりあえず本文を紹介し、あわせてその撰述の時期や内容などについて、簡単に触れてみたい。

まず最初に、東大寺本『心要纂積』が、湛睿の著書と特定できた理由について明らかにしなければならない。湛睿(一二七一—一三四六)の行実については、まえに「湛睿の事績」で紹介したが、⁽³⁾生涯にわたり著作活動に専念している。とり

わけ華嚴関係の注釈書が多い。⁽⁴⁾ 杜順・智儼・法蔵・澄観など祖師の撰述にかかる、華嚴教学の基本的なものを中心に網羅的に注釈しているから、『心要』の注釈書があっても、何等不思議ではない。また凝然や智照にみられるように、東大寺華嚴における『心要』の重視も、その可能性を増幅するものである。つぎに湛睿は『華嚴五教章纂積』『華嚴演義鈔纂積』『華嚴還源觀纂積』⁽⁶⁾などのように、その注釈書の題名に「纂積」⁽⁷⁾を使用している。また金沢文庫資料で『戒本見聞集』四十一として整理されている湛睿自筆稿本のなかに、「雖即心即佛唯證者方知」（本文十五表）「若有證有知則惠日沈没於有地」（本文十五裏）「若無照無悟則昏雲蔽於空門」（本文十六表）の三項を注釈した一紙⁽⁸⁾（裏書あり。写真①②参照）が混入していた。写真①でもわかるように、抹消・加筆挿入などがあり、明らかに湛睿の草稿本であることがわかる。いまこれに該当する『心要纂積』（後掲本文）十四表十一行目「者交徹意云二隔本明修」⁽⁹⁾から、裏書「現量事」（十四裏十四行目まで）を除いた十七表二行目「空門法喻並拳謂莽湯」までを比較照合してみると、わずかに誤字・脱字などがあるが、ほとんど合致している。また写真②は湛睿草稿本の裏書であるが、この右側の部分に対応する『心要纂積』十九裏八行目「長水云真性明了……」から、同十行目「悟是始覺之證悟」の「裏」（裏書の意）と注した部分、および写真左側の部分に相應する『心要

纂積』二十八表八行目「問心と作仏者……」から、二十九表一行目「念と皆具仏智故仏令深微」の部分も、脱落分などを除きまったく同じである。以上三つの理由から、東大寺本『心要纂積』は間違いなく湛睿撰であることがわかった。

つぎにその撰述の時期については、これを証する奥書などを欠いているから明らかでないが、湛睿草稿本の書体が、湛睿三十歳代の書体に類似している。とりわけ延慶元年（一三〇八）から三年ころ、鎌倉極楽寺において著わした『華嚴経探玄記疏抄類聚』に著しく類似している。またあとも触れるが、湛睿は凝然の『心要義鑑』を二回引用しているが、智照の『心要洞玄記』はまったく引用していない。『心要義鑑』の撰述年は不明であるが、まえに挙げた『三国仏法伝通縁起』の刊記によると、応長元年（一三一二）、『三国仏法伝通縁起』『十重唯識瓊鑑章』（正応五年＝一二九二撰）とともに『心要義鑑』を大覚寺法皇に進覧しているから、『心要義鑑』の撰述はそれより以前ということになる。また『心要洞玄記』はその奥書から、応長二年（一三二二）三月二十日、鎌倉松谷寺で著わしているが、その当時湛睿は松谷寺に近い極楽寺を中心に活躍している。なお湛睿はのちに智照から、その手沢本（華嚴関係）七部を伝領しているが、はやくから法兄として密接な関係にあったと思われる。これらを勘案した場合、常識的立場から、『心要纂積』の撰述は少くとも智照の『心要洞

玄記』撰述と同時期か、それ以前としなければならぬ。おそらく延慶ころか、あるいはそれに近い時期と思われる。

それでは東大寺本『心要纂積』について考察してみる。ま
ず書冊の形式は一卷一冊、袋綴（縦12・5cm横19・8cm 33枚）
無界、一頁12行×14行、一行12字を中心に15字×10字、楮紙、
前表紙には「心要抄物」とあり、右下には畢筆で「春位之」
の手沢名がある。また表紙裏には「奉施入万田村福寿寺常住」
の墨書があるが、この万田村福寿寺については不明である。

内題は「心要纂積」、奥書には「于時康永元年八月十於南都
戒壇院新方丈西面寮書寫了 小比丘交尊」とあり、その左横
に異筆で「伝領 春位」と記されている。これらによって、
何時のころか明らかでないが、万田村福寿寺常住として施入
された本書は、交尊が康永元年（一二三二）八月十日、東大
寺戒壇院新方丈西面寮で書寫し、これを春位が伝領したこと
がわかる。交尊・春位はともに鎌倉末期から南北朝期にわた
り活躍した学僧と思われるが、交尊については本書の書寫以
外まったく不明である。しかし春位は『大疏鈔玄談義解』
『智障断位短积』『起信疏見聞』などを書寫している。⁽¹⁰⁾

注釈の様式は智照の『心要洞玄記』⁽¹¹⁾と同じく、南都の伝統
的な注釈方法に基づき、逐語的で、博引傍証あますところが
ない。しかし前後の関係から、二十七裏と二十八表の間に、
量的にはわからないが、脱落があると思われると同時に、後

半は前半と違いいささか注釈が粗雑にわたっている。あるいは
未定稿のものだったかも知れない。またテキストが善本で
なかったか、もしくは筆者の不注意によるものか、誤字・脱
字が随所にみられる。なお湛睿稿本の裏書部分は転写にあた
り、該当する所に「裏」と注して表に挿入している。

また引用文献は『心要義鑑』をはじめ、『華嚴經』『華嚴經
普賢行願品』『華嚴經探玄記』『華嚴經略策』『華嚴經疏』『華
嚴演義鈔』『華嚴經綱要』『貞元疏』『華嚴演義鈔会解記』『大
乘起信論』『起信論注疏』『起信論疏』『起信論疏筆削記』『円
覚經』『円覚經略疏』『円覚經略疏抄』『楞伽經』『達磨悟性
論』『禅源諸詮集都序』『宗鏡錄』『靈源筆語』『緇林宝訓』
『景德伝燈録』『仏頂經』『密嚴經疏』『心經略疏』『梵網經』
『梵網經疏』『四分律羯磨疏濟縁起』『肇論』『中論』『釈摩訶
衍論慈行鈔』および外典の『周易』『論語』『礼記』『文選』
『爾雅』『爾雅疏』『蒙求表』『玉彪之水賦』などである。

以上東大寺蔵『心要纂積』は、湛睿が延慶ころ著わしたもの
で、内容は南都の伝統的注釈——逐語的で博引傍証——によ
る『心要』の注釈であることを述べたが、これは擬然の『心要義
鑑』、智照の『心要洞玄記』とともに、東大寺華嚴における『心
要』の重視を暗示するものである。また東大寺における『心要
纂積』の受容は、『華嚴演義鈔纂積』『起信論義記教理鈔』『華嚴
還源觀纂積』の受容とあわせ、湛睿の東大寺教学に及ぼした影

響が、いかに大きかったかを証するものである。なお引用文献中に、従来『明和本戒壇院凝然所述書目』や、『三国仏法伝通縁起』の刊記などによってのみ知られている、『心要義鑑』の佚文を二条含んでいることも注目しなければならぬ。

(附記)

東大寺図書館新藤佐保里氏にいろいろ御教示を頂きました。厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 愛知学院『禅研究所紀要』第六・七号参照。
- (2) 新藤晋海氏『凝然大徳事績梗概』参照。
- (3) 本論集第十六号参照。
- (4) 拙著『金沢文庫資料の研究』参照。
- (5) 全部で四十余部あるが、従来刊行されているものはわずかに『華嚴五教章纂釈』『華嚴演義鈔纂釈』(卷三十八―四下之五までだが、湛睿の稿本は残簡ながら十六下まである)『起信論義記教理鈔』『起信決疑鈔』の四部である。また『注法界觀釈文集』および『華嚴經旨帰見聞集』は、本論集第十四号と第十七号に復刻紹介した。
- (6) 東大寺蔵、本書も著者名を欠くが、金沢文庫の断簡により湛睿撰であることがわかる。
- (7) 湛睿は『華嚴演義鈔』を注釈するにあたり、何回も推敲しているが、はじめは「見聞集」と題し、定稿には「纂釈」と

改題している。

- (8) 他に残存断簡がないか、鋭意探索したが、現在まで発見できない。

- (9) 「裏書」を示す注記が欠落している。

- (10) いずれも東大寺図書館蔵である。

- (11) 智照の『心要洞玄記』は『心要』を注釈するにあたり「大分為三、初明本有、二明修生、三明本修無二」とするが、湛睿の『心要纂釈』は「大分為四、初約本有門、二約修生門、三約二門不二、四結勸安心」としている。

凡例

一各葉ごと右上に枚、表・裏を注記した。

一改行は原文のとおりとした。

一虫損・汚損などにより不明の部分は□□に記した。

一漢字は組版の都合上、つぎのように改めたもの以外は、原文どおりにした。

充↓疏	丸丸↓究竟	井↓菩薩	余↓爾
炎↓涅槃	花ム↓花嚴	虫↓融	弓↓卷
井↓菩提	早↓畢	慢↓慢	九↓凡

一本文廿四裏の囲んだ部分は、廿七表の○印の所に入ることを示す。

一金沢文庫資料断簡(湛睿自筆)により校訂した部分は「」を附した。

一私に校訂した部分は()を附した。

(一表)

心要抄物

春位之

湛睿の『心要纂釈』について(納富)

(一裏) 發微録云

雖者縱奪之辭コトハ指大道ヲ為本ニ縱也モ而不備明サハ下奪也文准此尺
可思之

(異筆)
一奉施入

万田村福寿寺常住」

(二表)

心要纂釈

至道

將欲尺此心要ニ大分為四ニ初約本有門ニ約修生門ニ約二門ニ不ニ四結勸安心ニ初中有三ニ初物標ニ別尺三結門今初也

問此之二句云何惣標乎

答皇太子久聞老莊之諸語ニ指

冥默之極理為幽玄之至道ニ

故今牋主得彼所問而答云至

道本乎其心起信注疏上云

花嚴所宗雖四法界而彼疏云該唯

一眞法界謂寂寥虛曠中深包

(二裏)

博惣該万有即是一心云々准之可

知宗鏡録云諸部惣句有為無為染淨諸法界皆心為本云、

問至道者如何答至者眞也極也裏

書不盡言等周易十翼中云書不盡言一、不盡意文選全同

以簡請文有人云俗書簡者

得道云也論語云居解ケイニ簡行ナウ簡フワン夫子之簡カムハ大簡カムノ簡文

演義四下云至妙靈通曰道莊子云

黃帝遇廣成子ニ問至道ニ廣成

子曰至道之精窈ヨウ冥メイ至道

之極昏ク默ク云、礼記云雖有

（三表）至道ニ弗学不知其善云、梵網

經云孝順至道之法云、至道之言

例證雖多皆欲至理玄極ニ之相也裏

義監（鑑）云以徳宗長子立為東宮ニ、

皇太子帰清冷〇皇太子者

指順宗在東宮之時徳宗崩

後皇太子即位名順宗文

問諸部惣句皆心為本故大疏廣

立十重一心ニ而今所言心者何心乎

答為遊此監次下句云心法本

乎無住云、意權少所談之心

者並是有依有住也所以云何且

（三裏）

如唯識等說心法曰縁生既有所

依託何無住以為諸法之本源也

裏

梵網疏第一云至道法者謂至極之

道莫先此法ニ又以此道ニ能至於

果ニ故云至道ニ此即道能ニ至也

謂作了因ニ至涅槃果ニ又作生因ニ至

菩提果一云、文裏

禪詮上云今性相二宗互相非者

良由不識眞心每聞心字將謂

只是八識不知八識但是眞心上

隨縁之義故馬鳴菩薩以一心為

法以眞如生滅二門為義云、然

（四表）

則彼相字意既諍本博相依

住義又是眞心隨縁之所成也

唯今眞心、為二門惣所依、而自已躰

性者依無住故云心法本乎無住矣

問無住者如何答演義七云即淨

名第二推善不善之本故經云

善不善孰、為本、又問身孰為

本答曰欲貪為本又問欲貪

孰為本、答曰虛妄分別為本

○又問顛倒想孰為本、答曰無

住為本又問無住孰為本答

曰無住則無本文殊師利從無住

本立一切法睿公尺云無住即是實

(四裏)

相異名実相即性空異名故無

性有一切法云、起信疏序云但以

無住為性隨派分歧逐迷悟而

昇沈任因緣而起滅云、筆

一云此性雖寂寥虛曠冲深

包博、非生非滅不垢不淨、然

不住此一向寂滅、非染淨、

而隨彼能熏成一切法、隨染即

九相生滅隨淨、即三乘聖道、

皆由眞如以無住、為其種性、

湛睿の『心要纂釈』について(納富)

亦由性是無住故能然也淨

名云從無住本立一切○非同

(五裏)

他字明眞如躰一向堅密、猶如

玉石不受熏習、不能隨緣

但説頼耶為染淨本受熏持

種也、准此等尺應知問凡云心者

緣慮積集、知境、為相只是

有為生滅之法而今行此等、

別立無住眞心者其文義如何答

起信論唯是一心故名眞如等所

言覺義者等又自性清淨心又相

大等又問明品疏抄

二別尺亦三初躰性幽玄二具德

無際三離過清淨初躰性幽玄者

(五裏)

裏

自至道至能廣當起信二門不分

心自非有至不離當眞如門自

迷現量至廓徹當生滅門

於初中、有二自初至寂然躰

包含下德相業用

湛睿の『心要纂釈』について（納富）

二八二

起信注疏上云初唯一心為本須即

花嚴經一眞法界然花嚴所宗雖

具四法界而彼疏云該唯一眞法

界謂寂寥虛曠冲深包博

惣該万有即是一心正當此門躰絶

有無相非生滅莫窮其始寧

見中邊真如門迷之則生死無

（六表）

窮外之則廓爾大悟即下已上生滅門

無住心躰靈知不昧性相寂然文

問答只惣云無住等一但遮非表請

示其躰答今文云無住心躰靈

知不昧等文問無住即是実相

異名実相一即是性空異名云

故知無住躰可畢竟性空也何

還存靈知之有一乎若存靈知

之有則不可成畢竟性空之義

如何答禪詮下云空字以諸法

無性為性一之字以靈明常住不

空之躰一為性云密嚴經疏第一

云然如来蔵有其二義一者空

（六裏）

義離性相故二者不空義具過

恒沙功德故具有二義故名如来

蔵但有空處必有性徳無有

但空無功德處唯除二人所得人

空但空無徳大乘所存如来蔵

者即不如是云一何況起信論云

如実空以能究竟顯実云一准之

可知禪詮上云問既云性自了一

常知何須諸仏開示答此言知

者不是證知意説眞性不同虚空

木石故云知也非如縁境分別

之識非如照躰了達之智直是

眞如之性自然常知故馬鳴

（七表）

菩薩云（如脱か）眞者自躰眞実識知花嚴廻

向品亦云眞如以照明為性云一故知

上云無住正簡於相宗今云靈知

且別於空宗欵即此靈知之心正

是達磨所傳之妙心也故傳燈

云達磨大師示二祖云淨智妙

明躰自空寂云一又云空寂躰

上自有本智能知云一宗鏡云

達磨所傳妙心不出知之一字
云、近世靈源禪云此宗旨

号正法眼藏涅槃妙心者乃凡
聖共有之靈知也云、問今
所言知者尚是屬用前克而

(七裏) 論其心昧者如何

答即今文云性相寂然云、

問今所言性相者如何答願鈔
云若相若性皆眞性尚常

徧者上句性字是諸法無性之
性下句性字是本覺之性上句
性相、對但明眞俗二諦下句
眞性即第一義諦故攝性相
全同眞性而常徧也如鏡攝

影及空全同明也云、准之可知
問若准此尺、

裏

靈知不昧事

問何只不云知、而靈知乎

(八表) 円覚略抄第一上尺、心也者中靈○

湛容の『心要集釈』について(納富)

靈明之疏文云靈明者若但云明、
未揀日月之類故云靈也意云

心之明者在無法、不知而無分
別無法、不現、而無差別、幽靈
神聖、寂然洞然故云靈明、文

裏

靈知不昧性相寂然事

問性相寂然之言為屬上句為屬
下句答一義云略抄一上云积心寂
而知者云寂是知、寂知是寂、
知寂是知之自性、昧知是寂
之自性用故清冷大師答順
宗皇帝心要云靈知不昧性

(八裏)

相寂然又云以知寂不二○中道文

問四種心中何乎

禅源詮上云汎言心者略有四種、梵

語各別也翻訳亦殊一、訖利陀

耶此云肉團心、此是身中五藏、

○二緣慮心、此是八識俱能緣慮

自分境、故○三質多耶此云

集起心唯第八識也、積集種子、

生起現行^一故○四乾栗陀耶

此云堅實心^一亦云貞實心^一此是

真心也第四心也

裏 寂然事

略抄一上云寂者是實躰堅固常

（九表）

定不喧動不及異之義經云一切空

寂法是寂不空若無真心之躰

說何物寂何物不及耶^文

包含德用該攝内外能深能廣^文

演義一上云清淨法界杳々冥々以為

能含恒沙性德微妙相大以為所

含^云、意云心躰寂然[、]富有万

德^一而其躰尚深廣無際限故演

義次下文云相依□性々無不包

故稱為含性躰無外相德有名

々々之數不能遍無外之躰故^云、

故云包含德用乃至能深能廣^一也

大疏云即用而真故甚深用者

（九裏）

涯畔故廣大^上言德用者演義

三云德用者即德相業用^上覺

（十表）

鈔一上云德即相大用即用大^上

又云一切諸法草不一盡是性之德

相性之業用^一如金之器々皆

金^一如鏡像々々皆鏡故^上内外

者演義^上一眞法界本無内外^至乃

義分心境^云、准此尺者能反之心

為内所反之境名外^一是則緣起

心境以所攝本覺眞智以為能

攝又從初至此已明一心即具三

大性相俱融則是円教一眞法

界故長水云即花嚴經一眞法

界但彼以性相俱融名為法界^云、

三離過清淨

裏

義鑑^云言該攝内外者此一心法在

内不隱在外不顯兼含内顯其

相貌内謂六根外謂六境内是自

所具法外是他所具法如是内外

所約極多皆是心法所該所攝^文

非有非空不生不滅無終無始^文

義抄一上云理円言偏言生理喪法

無想相思則乱生云、准而言之
上明真心之躰性深廣、包含徳用、
該攝内外、非言思之境界

(十裏)

故今百非息其攀縁、四句絶
其増減、也於中非有無者遮
四謗不生滅者離四相、無終始
者絶三際、也言非有非無者大
疏云欲言其有、同如、絶相欲
言其無、幽靈不謁云、又非有者
遮法相宗唯有識故言非無
者遮無相宗心境俱空此並偏
執未既断常故今遮之、既
遮偏有偏無、其躰能有能
無也即眞之有、是法相宗即
有之眞是無相宗偏執故共

(十一表)

融即故得今發遮者為雙取之兩
不相離方成無尋之眞心矣次、
不生不滅者起信疏上云隨妄不
生約治不滅又修起不生處染、不
滅云、義抄十上云然無生多義

湛睿の『心要纂釈』について(納富)

略有二義、一事無生縁生之相
即無生故二理無生円成実躰
本不生故、無滅之義准此應知
次云無終無始者絶三際也問筆
云非生故無始非滅故無終、
義云或説眞性無始無終性無
生滅故恒沙性徳依躰説相亦
無始終、准此等尺已云非生

(十二裏)

非滅今云無始無終、全是一義未
必別義欵如何答名義無定
故隨便尺且如起信疏上云報化
二身眞如大用無始無終相續不
断云、又云如来一念遍應三世所應
無始故能應則無始猶如一念円
智遍達無邊三世之境、無邊
故智亦無邊、之智所現之
相故得無始亦能無終、此尺
無諍約三世、尺之不可定執矣
第三結門
裏
覚抄一上云知者謂躰自知覚眼、

不昧^カ棄之不得^二取之不得

(三表)

是當躰來顯義非分別比量義

裏 非無別事

抄十一上云非即非其自躰^ハ無

即乃是無他^ハ故非無^ハ二言理

則懸隔文

求之而不得棄之而不離文

問科 自下結門^ハ其意如何

答三大法爾^ハ本來自有也非作

故有^ハ是名本有其三大者不

可外求^ハ即自己之既心是也

故云求之不得^ハ亦云棄之不離^ハ

於中初句^ハ出文殊般若及起信

論也故彼經云仏告文殊汝於仏

(三裏)

法^ハ豈不趣求文殊言世尊我今

不見有法非仏法^ハ者何所趣求^云

起信論云心無形相十方求之終不

可得^云筆云此意顯異權宗

所説仏果無漏功德並是修生今此

論宗但即修顯本自故金銀生

像可以喻之^云次句見思益^ハ經^ハ

故義少七云即彼經第一時有百比^(五脱)

丘聞説法^ハ從座^ハ去等網明菩薩令

思益梵天^ハ為作方便^云梵天言

善天言善男子縱使令去^ハ

至恒河沙劫不能得出如是法門^ハ

譬如癡人畏如虛空捨空而

(三表)

遠存所至處不離虛空^ハ此諸

比丘亦復如是雖復遠去不出

空相^ハ不出無相^云雖語借之而

意異彼謂彼明不出空相^ハ今

弁不離真心^ハ應知問如上非有

非無等云遮四句等情執^ハ今此二

句遮取捨之情^ハ執也何科結門

耶答普賢三昧品疏

大文第二約修生門二初略叙二廣

述初中亦二初拳顯悟

迷現量^ハ則惑苦紛然悟眞性^ハ則空

明廓徹文

略策云迷因無明橫起似執東

(十三裏)

為西悟稱眞理而生如東本不

易云、言現量者汎論有三一者

慈恩云離名相等所有分別現

量、別轉故名現量云、是三量

中之現量也二者慈行云現量境

界者現今分別量度之心所緣一

境界非彼三量中現量心也云、

此上二義苦約心說而屬現量次

通三量、欵三者貞元疏四云自心

現量者不同三量眞現量也謂

不了万境皆自心現如心分量云、

楞伽經云如愚不了繩妄取以為

蛇不了自心現妄分別外境云、此

等並是約境以說而今文當第

(十四表)

三義矣惑苦紛然者眞心如境標而

顯現不知眞心現故斗為外境既是

心外故雖違順境生愛恚念由此妄

念造善惡受苦示報、眠、生死

而不能脱皆由橫起根本無明故云

爾也紛然者交乱貌也謂習因習

果不断交雜不并始終故

湛庵の『心要纂釈』について(納富)

言空明者拳喻、顯法演義云日光

合空、無際智符実相、稱実無

邊云、廓徹者願鈔云廓謂空

廓徹者交徹云、意云二隔本明修、

裏 現量事

貞元經第六解脫云善男子一切凡

愚迷仏方便執有三乘不了三

(十四裏)

界由心起不知三世一切仏法自心現量等文

同疏第四云言不了三界由心所起者

此當弁迷六地經云三界所有皆

一心作七卷經云彼愚癡人執有三

乘不説唯心也有境界不知三世

一切仏法自心現量者尺上不了三

界所以、不能知唯心教故七卷

經云彼人不知去來現在諸仏所

説自心境界言自心現量者不同三

量眞現量也謂不了滅見外五

塵執為実有下示不了知心

現量義不知心現謂有実故同

於翳眼取外空花若知唯心

三一俱遣下影過患 裏



写真① 湛睿筆『心要纂釈』断簡（表）

（十五裏）

雖即心即仏唯證者方知文

問三大法爾、靈知本有者何故有迷

方悟修乎故今通云如是法理唯證

方知意云前言知者不是證知只

是本覺之靈源也亦是性德素法

身也而此靈知之心即与諸仏無分

毫異一雖然若不證者爭知之乎

故須信解眞正万行齊修瑩

摸內之金容一剖塵中之経卷一

輪廻夢覺智恵花開故義抄

云雖有此性若無觀智不能成

果今由觀智令成彼果云、此之意

也二塵迷有三初斥偏解二示悟

修三明證入即願抄云從凡至聖

（十五裏）

不過信解行證云、初中亦二初斥

有見也

然有證一有知一則惠日沈没於有地一文

然歟若者爾雅疏云不定之言云、有難

云若許證知則実^ニ有法^ヲ可證知^ス

乎故今通云眞智正證之時都

無所得何実有法可證知乎故

綱要上尺智契理有五重中

第三能所俱泯義云諸部般若

說無得無證以無得故心無罣碍

仏得菩提若有得有證於仏法

中為增上慢云、仏頂經云知

見立知、即無明本知見無見

期即涅槃云、宗鏡云或立知

(十六表) 而存所知或言有證而背天

眞云、今且情知名知、眞證名

證准彼起信論尺證發心之義、

可知之惠日与有地法喻交拳、

惠与有者法日与地者喻故謂朗

然妙惠明如日照有所得心堅

実如地故云爾也沈没猶淪

溺矣二斥空見

若無照無悟則昏雲掩蔽於空門、

宗鏡云或迷於幻躰云立空無

之宗、或滯理溺無為沈云、

問若存照知、即沒有地、故知無

照悟不可有其過、何非之耶答

湛菴の『心要纂釈』について(納富)

(十六裏) 円覚経威徳章云無知覚明、

不依諸礙云、同略疏六云身觸

為覚、心縁曰知、乃然此靈心上而

無頂、下而無底傍無邊際、中

無在處、既無當中、何有東

西上下、欲言空寂不似大虛欲

言相用不從縁起、欲言知見、異

於分別、欲言頑礙、異於木石、

欲言其覚、不同醒悟之初、欲言

其明、不同日月之類、故諸経教

於寂靜空無、可為邪小、於知

見明覚、互泯互存各有深意、

今此欲入觀門、恐知宗引分別

(十七表) 念、故宜但明也云、昏雲、但是喻也

空門法喻並拳謂莽湯空是

迷乱眞理、猶雲覆空、而云門

者眞空之理聖智通故云門

中論云空是大乘初門云、慈恩

云空為門故入於眞性云、

第二示悟修、有二初略示二委

示初中亦二初稱実悟修

若一念不生則前後際断照躰獨立、
物我皆如ナリ文

覺鈔ニ引此二句注上句云即頓

修也注下句云即頓悟也即
續引荷澤云一切善惡都莫

（十七裏） 思量言下自絶念相修也正無念相

心已自知悟云也問有人云若依

尺論鈔ニ則信解真正之行相

之故彼鈔云清冷云夫欲運心

修行先須信解真正ニ信解不

正所修一切皆邪縱使精勤從

為勞苦今則頓信本有

眞界本無々明生死本明涅槃

本成彌滿清淨中不容他ニ照

躰獨立擬心即差一念不生前

後際断名為眞正云但見此鈔

尺ニ信解与修行相對而明大分

為三初二句惣標次信解不正下反

（十六裏） 明三今則下須尺於中初五句尺

信解真正云翻前不正トモニ言彌

滿スハ下尺修行眞正トモニ翻前皆邪トモニ

故知此尺不可違覺鈔ニ也言一念

不生ニ者演義三上云非但生於餘

心ニ縱生菩提涅槃ニ觀心見性亦

曰生心ニ並為妄想ニ念都盡方曰

不生云大疏云問有問言夫妙行

者縱唯無念ニ今見善ニ見惡ニ礙

離ニ願成疲役身心豈當為

道ト答若斯見者離念求於

無念ニ尚未得於眞無念ニ也況念

無念之無導耶又無念但是

（十六裏） 行之一也豈成一念頓円如上所明ニ

也行学之者願善當心云

言前後際断者

裏

一念不生前後際断文

貞元疏二云若云頓悟頓此通三

義若先悟後修謂廓然頓

了名之為悟不者不證不収不

攝曠然合道名之為修此則解

悟以定為門亦猶不拂不瑩

而鏡自明若々先修後悟謂依

前而修忽見心性名之為悟此為

□□證悟則修如眼藥悟如

□病除若云修悟一時謂无心立

(十九表)

照任運寂知則定惠雙運如

明鏡无心頓照万像則悟通解

證若云本具一切法名之為頓

一念具足十度万行名之為修則

修如飲大海水悟如得百川

味亦通解證文

禪源詮下云有云頓悟頓修

者此說上々智根性根勝故悟樂欲

欲勝故修俱勝一聞千悟得大惣持

一念不生前後際斷斷障如斬一縷絲

万修頓斷修德如染一縷絲ニモトアリ万條頓色

荷澤云見無念ハハ躰ムム不逐物ニセ一生セ又

(十九裏)

一念与本性相應八万波羅蜜ハ此人三業ハ

唯獨自明了也餘人所不見ニ剛金

三昧云空心不動具波羅蜜法花說父母所

湛睿の『心要纂釈』について(納富)

生眼耳微見三千界等也

且就事跡ニ而言ハハ之ニ如牛頭融

大師ニ之類也此門有ニ二意ニ若因

悟ニ而修即是解悟若因修ニ而

悟即是證悟文

長水云眞性明了教理俱成何言

無照文無照指本覺之靈照無

悟是始覺之證悟裏

言照躰等者文覺鈔云照躰獨立

者是生公詞云々又云照躰是非

(廿表)

一氣云々同疏尺云物是外物我是

已身云々言皆如者覺鈔云

二證理盡性

直至心源無智無得ニ不取ニ不捨ニ無

對無修無證無悟文

長水云心源即無相眞理也契此理

故名無生忍即根本智也云々

問直至者意如何答大疏云有

作之修多劫緣成敗壞無心

躰極一念契仏家云々異也于迂

廻修證歷於漸次階級ニ速

窮理極故云直至、言心源者覺略鈔第六下云円覺妙心是諸

（廿裏）

法之源也心即是源、名為心源、

亦可心是能断所断染淨、

心也源即覺性真心、此則是

心之源名為心源、前持業尺

後依主尺二意皆通云、

自下明契會玄理則迹喪□

也於中有四對二境智能所對

也心經略疏云彼知空、智亦不

可得故云無智即此所知空理

亦不可得故云無得云、言不取

不捨者二取捨分別對也円覺

經云無取無捨云、同疏云所證之

境非得眞、告妄、捨龜、取妙、

（廿表）

云、言無對無修者三解悟修行對

以無對是解悟智故無修、知円覺

經普眼章法界觀初諸拂迹入

玄之相垢盡對除云、同疏尺云所

離之垢既無也對離之智何立云、

准之可知言無證無悟者曰有本云但有三對闕無對与無悟之

四字、又傳燈錄載此心要、而闕

無證無悟之四字、

裏 直造心源等事

一義云前方便觀也自下根本觀云、

一義云上来稱実悟修也自下拂

迹入玄也

（廿裏）

一義云上来、觀行円妙也自下稱

実同仏也故円覺經普眼章上

説觀行成就、了次明頓同仏境、

中有用心同見境同稱実同之三

科、其第三稱滅同科疏三稱

実同稱法界眞実性故文

經云其所證者無得無失無取無捨

其能證者無作無止無住無滅文

同略疏注所證之境非得眞、

失妄、捨龜取妙、注能證云能

證之心都無分別離於四病文、

又同章説法界觀、其拂迹入玄、

經云垢盡對除即無對垢及

(三表)

說名者文同注疏云所離之垢既

無、對離之智何無○對垢者菩薩

也說明者、仏也既無寸治之智何

有起智之人、淺深之執本無何

有說教之者、故俱無也寸機之

仏亦不可得方見法事、々々說

經、義在斯矣准此等尺、今云無智

無得者雙泯能所、不取不捨者

別證之境、無寸下、別明能證之

智就中、

一義云上來明觀行、自下結成也

故円覺經普眼章先說觀行成

就、次明頓同仏境、中說見境同云

(三裏)

修習此心得成就者於此無修亦

無成就文注疏云近結入境安心、

遠結觀行成就○若不泯之、則

雖無憎毀尚見持毀等故須泯

之方同仏見文 裏

裏 問此云證者指仏果欵答一義云

覺鈔云此中言證、一義云演義

湛睿の『心要纂釈』について(納富)

云今言修證者以五位通修故名

為修仏方究竟故名為證云、

唯下廣述前二門不二科

第二廣述有二初示悟二示修初中

迹二初案定法理裏

然迷悟更文然者覺苑云隔

(三表)

前起後之相云、□隔前略起後

廣也

裏疏三上云彼此同許以為案定文裏

問科云案定者如何答疏三上云

彼此同許以為案定云、

問何以此等文科案定、法理、開示

悟相、等耶答行願疏序云

指其源也情塵有經智海無

外、妄惑非取、重玄不空云、

同證一云本源深妙三三標指其

源指其源也者謂欲明、功用、故先

標、其源、也二正明深妙六一融、

情智、情塵有經者經有二義

(三裏)

一約喻二約法喻即塵含大

千経卷〇二約法者経是常義

今、ハス意明情塵生滅之念以智ヲ

推之スニテ、ナルコトヲ一牀即眞常ニ、故次句ニ云フ

智海無外ニ、若情塵非常ニ者ハ

即智海有外也、以外有情塵ニ

故既外無情塵ニ、故情即常ニ

也、然迷悟更ニ依ル、乃ニ似處ニ、陰ニ

而影滅スルニ、也二融眞妄惑非取ニ

者、然惑与取蓋一義耳〇夫妄ニ

惑者合是取執之義ナル、今以稱性ニ

融通スルヲ、惑乃非取ルカニ、故科云融ニ

（世表）

眞妄ニ也云、起信論云依覺故

迷若離覺性則無不覺〇若

離不覺之心則無眞覺自相可

説云、疏云初依覺成迷後□

迷顯覺云、略策云迷則全迷

眞理離眞無迷悟則妄本

眞非是新有云、問惣之二句

有何異乎答迷悟約機眞妄

約法ニ、問相依与相待有何異乎

答義抄云相依者依眞起妄

因妄説眞若無能迷所迷不
立云、二開示悟相

（世裏）

放曠任其去住文自在義也
大惠法語云放曠還同癡忽
人ニ他家自有通人知、文

裏← 然迷悟更依事

達磨悟性論云凡迷者於悟ニ

者悟迷（於脱カ）正見之人知心空無ニ

即超迷悟無有迷悟始名

正解正見云、裏

若求真去妄文

略策云事外求真二乘偏

眞即事而眞菩薩大悟

云、又経云知妄本自眞見

（世表）

仏則清淨文但此中喻者

即莊子意也云人有畏影カク惡

迹而去之走者举足愈數

而迹愈多走愈疾而影不離

身自以為尚遲疾走不休絶

湛睿の『心要纂釈』について（納富）

心窮性海万行頓齊修文

覺抄云奚是雙語辭文

爾雅云奚○也文

裏 円覺略抄第一上云清涼大師

所說万行並不離心但能覺

（廿表）

了自心現量畢竟清淨即

一念之中万行備足心不起止

也知不起觀也不緣万境捨

也止妄不生戒也安心諦理忍也

心無間斷邊也心躰離念法也

心之本覺也躰相無違僧也

六度三亦教並一心故花嚴經云

菩薩修諸佛法淨諸仏刹稱

□妙行詞伏衆生乃至得大

菩提悉不離心文

○第二妙用自在寂用無尋

放曠云放曠自在白也文選云

逍遙于山川之河放曠于人

（廿表）

問之世二濟曰放曠謂無拘束云

離世間品云入於三昧而示現行

住坐臥一切業亦名捨三昧正受

是菩薩遊戲文二靜鑒下權

實無尋謂演義云鑒權也

靜實也文源流者本末之

根也文選序云源流寔繁

蒙求表云源一流一文玉彪

之水賦云万流雖別同出於源

衆流雖殊同歸于海文

三語默下說默合道也或人云

□會法界也語動事也默靜

理即引抄

（廿表）

知寂不二等文意云知寂不二之

一心者始覺也此能證智也此智

自本覺流空有雙融之中道

者所證法躰也所證法躰空有

雙融法躰是本覺也最初信

智至妙覺一始覺還同本

覺故此意也

問心作仏者豈非再成仏之義乎

答抄一上云疏剖微塵之經卷

則念果成者第七顯因成果



写真② 湛睿筆『心要纂釈』断簡（裏）

益即出現品大經潛塵喻經
云如有大經卷○又經弁應

（其裏）
知一

會解二云科云顯因成果益者

塵喻情念二經喻仏智一喻中

既剖一々塵中之經一法中念

〔果智の下に則衆生情塵因中顯斯果智脱落〕

々相應果智一故云顯因

成果益一也新經序亦云情

塵有經一智海無外一也鈔又經

云下示念一果成之文則前

偈示意一即一切塵喻一切念一皆

具仏智一仏為除妄一令仏出現即

具念一果成義文准此心一々作

仏者衆生剎那一々前滅後生

（其表）

念一皆具仏智故仏令深微我等

前滅後生 處具足仏果智

□□□心一々作仏云也

行願疏云遇三毒而三徳円入一塵而

一心淨千化不反其慮一々方境順

湛睿の『心要纂釈』について（納富）

通于道ス一文同抄第一云入一塵

而一心淨者有二義一以情念ヲ為塵

念即無念故淨也二即微塵也

塵躰稱性ニ故淨也一塵一念既

爾千心万境惣ト然也故次云千化

不反其慮故心要云心ヲ作ル仏万境順

通于道即處ニ道成無一塵而非仏國文

（廿裏）
師云

難此尺非本有ニ始本不二心也觀

行者念即無念ナルヲ云作ル仏禪門ニ

一念ハ々々仏云如也念ハ々皆無念ナルカ

故云心ニ作ル仏故云千化不反其

通ト此所居即淨土ナルカ故云處ニ

道成等ニ故云万境順通于道ニ

一義云此尺不寄能觀人ニ橫約ト

法界衆生ニ云心ニ作ル仏ニ蚊虻等ノ念モ

即無念也本有當躰念ハ心ニ

々ハ仏也非始覺也

一義云此尺橫約一切衆生心ニ談ス

始本不二ト花嚴經云如来智

（三表）

惠無相智惠無尋智惠具足在
於衆生心中文

仏始覺智蚊虻等念ハ有之ニ故始本

不二也玄十六云謂仏果智與衆

生中因性本覺無差別故是故

即在纏之因具出纏ハ第六

云畫師不知此畫皆從心現喻

諸衆生迷自心量文

果法以円教中因果無二余聖教

中未更斯義文

消息事

義抄第六上云善消息之者易ニ日月

盈虛與時消息ス積ル消盡也

息生也謂可加則加可減則減可

出則出可沒則沒云消息文有又云

爾雅云軋カ法ハ在中才消息注云

消息擦而不遺文其猶ハ下ニ唯識唯心也

四分律刪補隨機（彌磨）羊广濟縁記第

三下尺ヲ故須消息之文云消息

猶言ハ□□ニ也

（三裏）

出則出可沒則沒云消息文有又云

爾雅云軋カ法ハ在中才消息注云

消息擦而不遺文其猶ハ下ニ唯識唯心也

四分律刪補隨機（彌磨）羊广濟縁記第

三下尺ヲ故須消息之文云消息

(三二表) 梵網疏上云至道法者謂至極香象

之道莫先此法ニ又以此道一
能至ク於果ニ故云至道一此即
道能至也謂作了因ニ至涅槃
果ニ又作生因一至菩提果一文

(三三表) 于時康永元年八月十於(マ)

南都戒壇院新方丈西面

寮書寫了 少比丘交尊

(異筆) 傳領春位

(三四表) 先民有イヘルコトハカル言トフクヘ 于スウセウニ菟薺モ詩

古賢者言有疑事一當ニ与ニ薪采之人一謀ト也

(三五表) □即心即仏唯證者文

問證者指何位乎

円覚略抄二下云此中言證但

取觀行相應之時現量所見

即名為證不必聖果文

湛睿の『心要纂釈』について(納富)